きびのさと
NO.101 月刊
昭和四十一年十一月一日　発行　（非売品）
岡山県都窪郡吉備町東町一三五字垣方呼電四三七番
吉備観光協会

○　板倉勝喜（かつよし）　（その二）

吉備津宮の秋祭り事件の請証文の末尾に

「右敬仰渡之趣一同承知奉畏候　若相背候ハハ重科可被仰付候仍御請証之措上申所如件

御朱印地
吉備津宮社領備中国賀陽郡宮内村　百性　火次郎　㊞
右火次郎兄　政右エ門　代兼同人親　八重助　㊞
板倉右近領分　同村役人惣代　組頭　里右エ門　㊞
社頭　村役人　惣代判頭　作兵エ　㊞

文化四卯年閏月廿七日
寺社御奉行所

（御朱印とは足利氏、徳川氏の時代に命令の証に朱印を用いて押した印である。別に黒印「墨付ともいう」があって、これは貴い文書に用いられた）

と書いてある。藩政時代宮内村（いま高松町で吉備津神社の地）は吉備津宮の社領であるが、治安に関しては庭瀬藩が取締りを行なっていた。それだけに庭瀬藩は権力をもちその家来たちは威張っていたのである。宮内の遊女街では常に喧嘩口論があり、時には刃傷沙汰も起った。また備前藩と庭瀬藩の武士たちの間では酒と女のことでイザコザを起した。遊里は現在でも危険な場所である。しかしいまでは廃止されてしまった。

○　板倉勝氏（かつもと）　六代

勝喜の二男にして元明八年三月六日江戸（東京）の屋敷に生れた。初め輝太郎、輝之進という。嫡男の勝益が病身のため廃嫡となったので、享和三年正月十八日十六歳で家督を継ぎ主水佑と改め従五位下に叙せられたが、翌文化元年十二月八日十七歳で病死した遺骸は本国三河国長円寺に埋葬したのである。母は側女の松本氏の女である。室は摂津守の女にして文化元年に婚約が結ばれていたが急逝したので他へ嫁いだのである。

○　板倉勝資　七代

勝喜の弟にして寛政六年十一月十九日江戸に生れた。勝氏の没後嫡子がないので文化二年三月十九日十二歳で養嗣となり家督を相続した。初め虎三郎といい後ち左京進に改めた。後ち越中守従五位下に叙せられた。しかし天保三年十一月廿一日病気に罹り隠居して号を愚山という。嘉永元年八月十七日五十五歳で江戸の屋敷に没した。菩提にふして三河国長円寺に埋葬したのである。母は側女にして江戸の人、高橋氏の女である。室は松平左衛門佐守綱方の妹にして文政九年十月八日、勝資が三十三歳の時三十歳で病死した。

天保二年の三月廿六日の夜半、岡山城下西大寺町の南側にあった今屋喜兵衛という商家の物置から火を発し折柄の強い西風にあおられて忽ち四方に燃え広がり、西室寺浄敬寺を全焼し侍屋敷二軒を灰燼に帰せしめ、七十余軒の町家を舐めつくした。この時板倉摂津守は遥かに岡山上空をさかんな火炎が焦がしているのを望見して驚き、隣藩の好みとして火防人数十人に出動を命じ龍骨車を走らせて應援に急行させた。（龍骨車とはいまの消防車のことで火災を消す道具である。大きな匣の上に横木があり中に仕掛があって横木の端を相方に持って上下すると中に入れてある水が断続的に高く噴き出す仕組になっている。龍吐水ともいい流飛する距離は人力の差に相違はあるが：五六間位である。いまの消防車からみれば足元にも近づけぬほど幼稚なものである）。

当時岡山府の表玄関は京橋下の舩着場にして、橋本町、西大寺、それから北へ曲って栄

町あたりが繁華街の中心になつていた。その日枝き廻りが一瞬にして焼失したので、その損害は莫大なものであつた。

丈れの今屋喜兵衛は在所にも居られず慈嶽のあまり一家揃つて浪花（大阪）へ移つたという。岡山の祭礼に行装する山車（だんぢり）の歌に「備前岡山西大寺町大火事に、今屋が丈元で五十五軒、コチヤエーコチヤエーし。」というのは後ちにこの火災を歌つたものである。余談ではあるが昔岡山の大火というのは枝倉昌信在政時代の享保四年に戸数一千七十七軒を焼失したこと公文献に遺つている。この大火は西大寺町の南筋の天瀬細堀（いまの千日前）の西側の大村定平というものの家から火を發して午前十二時頃から朝の四時頃まで燃えつづいてこのあたりを灰燼にしたとして残つている。当時も西の風が烈しく吹き荒んで火炎は京に奔つて西大寺町、紙着町、橋本町、川崎町の商業の繁んな町筋を烏有に帰し、更に旭川を越えて火の子は東西中島町、小橋町、大黒町、下片上町、上片上町、古京町を焼き盡して門田屋敷へ延び徳吉の農家にまで飛び火した。その区域は東西十一町、南北三町余に及んだという。

○ 枝倉晴貞　八代

勝氏の弟にして享保元年四月三日江戸に生れた。幼名は鍵之進という。勝資に嫡子がなかつたので跡目を相続し利之亟と改めた。後ち桂津守となり従五位下に叙せられた。

○ 嘉永元年三月廿一日疱のため四十八歳で隠居し号を茅山といつたが、翌二年三月十六日

枝倉勝成　九代

実は安藤對馬守信由の二男として文政四年三月廿五日生れた。勝貞の孤白丘嗣が絶えたので枝倉家を相続した。栽中守従五位下に叙せられた。嘉永元年六月廿五日に十八歳で江戸に梅死した（菩提寺の霊牌には八月七日とあり）

○ 枝倉勝全　十代

実は酒井志摩守忠恒の二男として文政十三年十一月六日江戸に生る。勝成の嗣となり嘉永元年十月十五日十九歳で枝倉家に入り、同二年五月七日庭瀬の任地に着いた。初め銘丘進といい長じて勝全に改めた。摂津守従五位下に叙せられた。安政五年八月廿二日疱に犯されて九歳で没した。

○ 枝倉勝弘　十一代

天保九年の生れで生所は明かにしていない。枝倉家の養嗣となり萬延元年三月十日二十三歳にして江戸に同候し徳川將軍家茂に拝謁し摂津守従五位下に叙せられた。元治元年十一月幕命によつて自ら落兵を率いて長州征伐に出陣し、芸州廣島に滞陣したが同年十二月廿九日毛利氏は幕府に代罪したので翌二年正月六日軍を解いて庭瀬へ帰陣した。その后再び長州征伐に出陣を命令せられたが四圍の情勢を考えて出兵しなかつたが將軍家茂の急死したので征長の軍は中止した。よつて將軍の後嗣として水戸藩主徳川有栄の子慶喜（よしのぶ）が二十一歳で十五代將軍になつた。しかし幕府の信望は次第に失われ諸大名は勤王と佐幕の両派に別かれて動揺を極めた。しかし尊王倒幕派が圧倒的に勝利を收め、ついに天皇を中心とする中央集権国家が成立し、政体は一大変革したのである。慶應二年十月十四日將軍慶喜はついに大政を奉還して駿河国七十万石に封ぜられた。つゝで明治二年十二月九日には土地と人民を奉還した。これが王政復古の大令である。

（当時庭瀬藩の本家筋になる松山藩（いまの高梁市）の枝倉勝静（第三將寺院義松林寺の項参照）は明治元年將軍慶喜に従うて江戸に走りつゝで会津に入り官軍にするどく反

抗したが戦い敗れて榎本武揚の軍に投じて北海道の函館五稜郭に落ち延び、最後迄戦い遂に官軍に降した。後ち赦されて江戸へ戻り明治九年に徳川家康を祀る日光東照宮の祠官となり同二十三年四月六日病にかかって六十七歳で生涯をとじた。

勝静が最后まで佐幕派にあったことは徳川氏の親縁の間柄にあり老中の要職にあったことによるもので事情はやむを得ざるものがある。是より先備前藩は勤王派として朝廷の命を奉じて松山へ出兵することを決し明治元年五月七日岡山を出発した。その文献によると、備前藩が松山表に出兵の人数は伊木若狭（忠澄）老臣を総大将として給人員一千七十四人外騎馬格式頭、内三十三人は士族十四人は御徒格共、外に足軽人足共にして、本隊は高梁街道を前進して吉備郡美袋村に達し、一時駐屯している時、松山藩から使者が馳せ来り恭順の意を表したので、松山市街は戦禍から免れたのである。朝廷は勝静の従男にあたる勝獨（かつすけ）を代を前藩した。後ち松山藩知事に任命したのである。

△ 長州征伐について之の発端を述べると、幕府の大老彦根藩主伊井直弼（なおすけ）は安政三年（一八五六）六月廿日朝廷の勅許をまたずして外国との通商に迫まられて假條約の調印をしたので諸国の勤王志士はその専断を憤り、萬延元年（一八六〇）三月三日の上巳の節句の日に直弼が儀礼に登城の途中を擁して桜田門外で殺害した。これより勤王攘夷の説が盛んになりその中心は朝廷を守護していた長州藩主毛利敬親は天皇親征の大詔を奉持して攘夷決行せんとしたが、当時京都守護職にあった会津藩主松平容保（かたもり）はこれに反対し、長州藩兵の朝廷守護を解いた。文久三年（一八六三）八月、攘夷派の三條実美以下公卿七人と共に長州に却け藩主に謹慎を命じた。其の間諸国の下級武士を中心とする藩制改革を呼ぶ尊王討幕の志士が盛んに活躍した。大和の五條の変（備前の浪士藤本真金（鉄

石）が主謀となり挙兵したが失敗に終った）。生野の変、筑波山事件などが続いて起った。その翌元治元年六月になって長州藩は国老福原元僩（もとたけ）を将として藩兵数百を率いて京都へのぼり、藩主も利敬親父子と七卿の寃罪を訴んとして会津藩兵と衝突し蛤門で交戦したが敗れて長州へ帰った。これが蛤門の変である。即ち同年八月幕府は勅命を奉じて尾張大納言を蒙り長州征伐の原因をなしたのである。慶勝を征長総督に任命し廿一藩の兵を長州に進めた。当時備前藩は国老池田出羽（采地は今の倉敷市天城）は藩兵一千百余人を総率して廣島に駐屯し、藩主池田茂政は国境の一宮まで出張した。備中では庭瀬藩主板倉勝弘は自ら藩兵を指揮して従軍し（兵数不明）十一月九日広島の打出に屯営した。また松山藩、足守藩、新見藩等も若干の藩兵が参加し、山陽道を下ったのである。美作では津山藩主松平慶倫は親藩のために山陰道方面の総督となり老臣永見、山田等が総勢四千人を引いて出雲路に入り、勝山藩は重臣三浦、戸村等数百人をもつてこれに従軍したのである。一方長州藩主敬親は事態の重大なることに驚き、支藩の岩国藩主吉川経幹の諫言を容れて幕府に恭順を示し、国老福島元僩外二名の首を刎ねて厚く謝罪したのであるが交戦にならずして和議はなった。よって各藩ども帰陣したのである。庭瀬藩も前にも述べたがその年の十二月晦日の廿九日に広島をたつて翌元治二年の正月六日に庭瀬に帰り正月の祝をした。然るに長州藩士高杉晋作や山県狂介（有朋）等はこの敗盟を嘆ばず藩論を統一して再び兵を挙げたのである。そこで将軍家茂は自ら東上して大坂城に入り、中国諸藩に対して再び征長の軍令を発したのである。この時備前藩は時局を勘案し書を幕府に送って出兵を止まるよう勧告したが容れられなかったので独自の行動をとり出兵を拒否した。庭瀬藩は出兵した記録がみ

えないが小藩の故に恐らく備前藩と同調の態度をとったものと思はれる。その他薩摩藩を始め他藩にも幕府の命を奉ぜざるものがあつて幕府方の志氣は振はないままに、慶應元年（一八六五）六月前進部隊は長州に攻め入つたが、すでに戰意は失はれていたので山陽道に向つた進撃軍は各所で敗北して廣島迄退却した。山陰道を前進した津山藩も散々に破れて矣をおさめて津山へ帰つた。時に浜田藩主松平武聰は長州軍を石見国益田に迎えて戰を挑んだが敗々に撃破され隊長山本半弥以下多数の將兵は戰死した。まして藩主は病に臥していたので志氣はあがらず、居城を焼き掃つく出雲に退き、後ち領地である美作国久米郡里公文村に居館をたてて移つた。これが鶴田藩である。

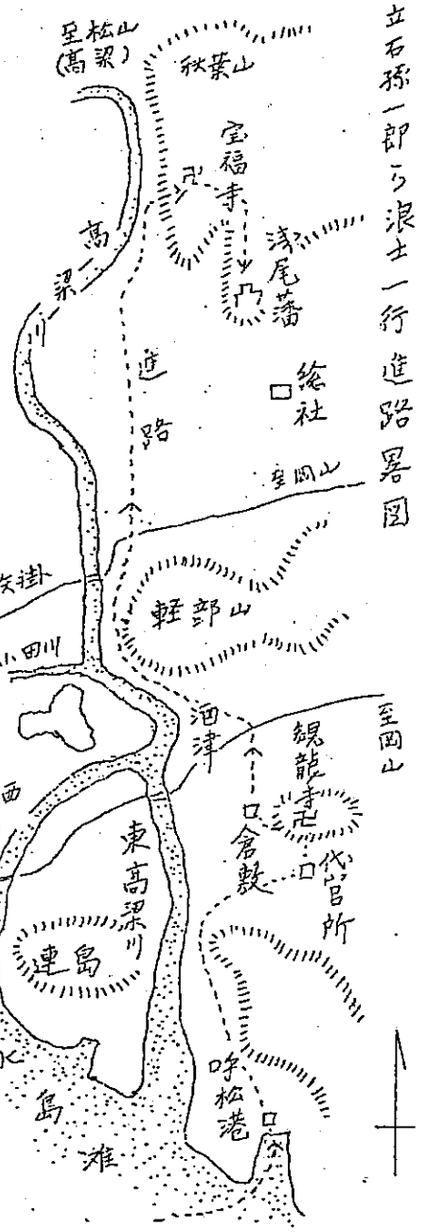
偶徳川將軍家茂は混乱のうちに大坂城で病死したので十二月勅命が出されて征長の師を停め、戰は終つたのである。事実上長州藩の勝利に帰したのである。これより幕府の威信は全く失墜し尊王攘夷論は尊王倒幕論にかわり、勤王志士の活動はめざましくなつてきた。当時御土では倉敷の封豪家大橋氏の養嗣大橋孫一郎は長州に走つて奇兵隊に入り慶應二年四月隊員数十名を引いて倉敷にあらわれ幕府の直轄地（天領地）である倉敷代官所（陣屋）を襲撃して焼き掃い更にその翌日には浅尾藩（総社市）に進み蒔田藩邸をも焼き掃つてしまつた。これが倉敷、浅尾騒動というのである。

倉敷騒動の発端となつたのは文久三年の十月に倉敷市向町の酒問屋吉左エ門父子が当時米穀の移出が禁止されているのにも拘らず法網をくぐつて米穀の買出しをめぐつて暗躍し、多量の米穀を舟で積出し児島湾口の小串沖に停泊している信濃国からきた回送船と結託して取り引きしていた。このことが幕吏の探知する所となつた。当時倉敷代官大竹左馬太郎は取調の結果下津井屋の親子と関係者数名を捕えて牢獄した。その翌元治元年十月に

代官の交迭があつて楊井久之助が赴任してきた。間もなく下津井屋親子は保釈になり出獄した。所が一ケ月を経てその年も暮れようとする師走の十八日の真夜中に浪士風のもの数名が下津井屋に押入つて親子を斬殺した。翌朝になつて幕吏が現場を検視した所、吉左エ門の首がみえない調べていると前を流れる倉敷川の河岸に投げ棄てあるのを発見した。早速犯人の捜索にあたつたが何故か役人も実をいれなかつた。これより先倉敷の富豪家大橋平右エ門の養嗣に敬之丞というものがあつた。この人は播磨国佐用郡上月の名主大石喜道の子で、美作国苫田郡二宮村（津山市）の親戚立石正介に寄食し後ち立石家と姻戚関係にあるこの大橋家に入つたのである。当時代官が下津井屋一家から莫大な賄賂をとつておりその外にも数々の不正事件がある事実を知つていた。丁度吉左エ門親子が殺されて帰宅すると間もなく養家を去つて長州に赴き姓を復して立石孫一郎と改めて高杉晋作の統率する奇兵隊へ入つた。孫一郎は倉敷にいた当時森田節斎について漢学を修めまた武芸を励み勤王の志が厚かつた。（森田節斎は森田月溪の兄である。第七情人物篇森田月溪参照）安政年間は外国船の来航と国内では勤王と佐幕の二派にわかれて騒いでいた時である。慶應二年の春立石孫一郎、益田主税等部下数十人の浪士を引いて長州を脱走し舟に乗つて四月の九日暗夜をついて呼松港（倉敷市）に上陸し一行は密かに倉敷へ向つた。港に置かれていた見張の番人はその挙動をあやしみ、早馬で倉敷の本陣へ注進した。この時代官は廣島へ出張中でその留守居に手間取つている所へ浪士らが抜刀して乱入してきた。幕吏は国学狂狷、防戦に努めたがいきりたつた浪士らのために九名の死者と数人の負傷者を出した上、役所、明倫館は放火によつて焼打された。浪士方にも数人の負傷者はあつたが数刻の後ち一行は凱歌をあげて一まず鶴形山の観龍寺に入つて

僧に乞うて白粥をすすり負傷者には夜手当をして少憩した。（観龍寺の山門には当時浪士が槍で傷つけた跡が遺つている）それより市街を北へ曲り枝けて高梁川沿の細道を辿り井山の宝福寺に入り、ここから山添の道を渚尾に出て藩邸に迫まった。藩主蒔田広孝は上京して不在であったが敵対したので家臣の荒木勝太郎以下六名は斬殺され邸宅も焼き掃われた。更に一行は高梁川を遡り松山へ進まんとしたが隣藩から救援部隊が来る

○ 立石孫一郎ら浪士一行進路略図



との情報が耳にはいったので、一行は間道を抜けてバラバラになって児島をさして逃げ去ったのである。孫一郎は密かに下津井にあらわれ讃岐の金比羅大権現の参詣客に変装して乗合船に乗って多度津港に渡り（いまでは汽車、汽船があり高松港経由であるが、藩政時代には必ずといったように多度津港を利用した）更に海路と関門海峡に迂回して能毛郡浅川の沢に上陸した所を長州藩の非戦党の遣わした壮士に押えられた。孫一郎は抜刀して健闘したが力及ばずして斬殺された。慶應二年四月廿六日の朝のことで、孫一郎は三十九

二才であった。元来倉敷は幕府の直轄地（天領）である関係上根強い佐幕主義であったことと、前に述べた代官の不正事件がいたく孫一郎の義憤をたかめたこと、武力が手薄であったこと、などから血祭りにあげられたものと思われる。

話がもとに戻るが、この事件の起る前に長州の浪士と稱するものが三四人庭瀬藩にやってきく幽背を迫まった。應対したのが国老森岡善右エ門武從（茂と蜻人物誌の項参照）であったが藩主勝弘の身辺に老陵の及ぶことを虞れ、側近はいち早く裏庭から小舟に乗せ、武芸指南役の守屋孝司（屋敷あとは、いまの寺坂素助の東奥にあった）らに護衛されて足守川口に一時避難した。森岡武從はいま藩主は多事のため不在にして俄かに返答は出来ないので後日を期したいと言うと壮士は再びやってくるとして確実な返事をあづけて横柄な態度で立ち去ったという。武從の奇智がなかったら一騒動が起ったであろう。藩では後難を虞れて早速岡山藩に使者を送って萬一の場合に備えたが、何事もなかった。やがて幕府は漸く回天の鴻業はなり難く政府によって身分制度が確立した。

（おわり）　この項未完）

吉備町・中田　店主廣井時雄
廣井鉄工所
吉備局電六三〇六番

プロパンガス・ガス器具
石油　類　各種燃料
備前瓦斯燃料吉備営業所
電話吉備局六三〇九　岡山市北長瀬
有線二七〇三　電㊁〇五一一番